

20. シェーグレン症候群の診断における唾液分泌量測定法としてのガムテストの検討

口腔外科学

後藤 聡、渡邊八州郎、武田真由美、
冨塚清二、藤林孝司

目的：ガムテストの信頼性の検証および、使用するガムの種類に対する評価とそのカットオフ値について検討した。

対象・方法：1)健康人26名を対象に、3回のガムテストを連続して行い、再現性を検討した。2)ガムテストとサクソントテストとの相関を、62例を対象に検討した。また、無刺激全唾液測定との相関を、38例を対象に検討した。3)ガムテストとサクソントテストについて、唾液腺シンチグラフィー、唾液腺造影および口唇腺生検とのSpearmanの順位相関を比較した。4) SS群36例、Control群38例を対象に3種類の異なるガム（無味ガム、ミントガム、梅ガム）を用いたガムテストを連続して行い、両群の分泌量を比較した。また、各ガムのSSの診断におけるカットオフ値を算出した。

結果：1)3回の測定値に有意な変動は認められなかった。2)ガムテストとサクソントテストの間には $r=0.84$ の、無刺激全唾液測定との間には $r=0.91$ の、それぞれ有意な相関を認めた。3)これらの唾液腺検査との相関は、サクソントテストとほぼ同程度であった。4)これら3種類のガムは、いずれもガムテストに使用できるものと考えられたが、梅ガムを用いた場合のカットオフ値としては14ml/10minが適切であると思われた。

21. 当科における最近5年間の急性肝障害の検討

内科学（消化器）

○星野孝文、室久俊光、大関順一、吉竹直人、松浦 晃、西福康之、岡田瑠璃子、小倉利恵子、小池健郎、人見玄洋、武川賢一郎、星野美奈、草野浩治、橋本 敬、真島雄一、國吉 徹、米田政志、玉野正也、飯島 誠、菅谷 仁、寺野 彰

【目的】急性肝障害にて入院した症例の病因とその臨床的差異について検討する。

【対象と方法】当科に1998年4月から2002年3月の5年間に入院した5304例中、入院時の臨床症状、および検査成績から急性肝障害を疑われ、かつ病歴の検討が可能であった144症例を対象とした。また胆道系疾患による急性肝障害は除外し、当科初診時急性肝障害を疑われて入院した自己免疫性肝炎や慢性肝炎の急性増悪例は含め検討した。

【結果】対象144例中、肝炎ウイルス性急性肝炎は49例(34.3%)でありその内訳はHAV17例、HBV24例、HCV8例であった。また自己免疫性肝炎は11例(7.7%)、アルコール性肝炎9例(6.3%)、慢性肝炎急性増悪9例(6.3%)、サイトメガロウイルス肝炎4例(2.8%)、EBウイルス肝炎7例(4.9%)、薬剤性肝炎19例(13.3%)、原因不明29例(20.3%)であった。

劇症肝炎は15例(10.5%)であり、内訳はB型急性肝炎7例(4例死亡)、原因不明5例(4例死亡)、B型慢性肝炎急性増悪1例(1例死亡)、自己免疫性肝炎2例(死亡なし)であった。

【結語】今回の検討では原因不明の急性肝炎が依然として多く、その病態の解明が待たれる。